

フランス語心理動詞の認知機能的考察
— 経験者直接目的語型とその過去分詞形を対象にして —

2023年9月30日（オンライン）

日本フランス語学会第344回例会

川上夏林（東京外国語大学／大東文化大学／武蔵大学非常勤講師）

本研究では、*énervé* や *agacé* のように心的事態の経験者が直接目的語に置かれる心理動詞（以下、直接目的語型心理動詞）とその過去分詞形を分析対象とする。以下(1)と(2)の対比から分かるように、直接目的語型心理動詞は、現在形では人称制約が見られるのに対して、過去形ではこの制約が解除される。この現象を議論の出発点として、直接目的語型心理動詞が機能的にいくつかのタイプに分けられることを発話行為論の枠組から論じる。

(1) a. Ça m'énerve !

b. ?? Ça l'énerve !

(2) a. Ça m'a énervé.

b. Ça l'a énervé.

まず、心理動詞に関する先行研究の分析枠組では以上の現象に対して説明を与えることができないことを述べる。その上で、発話行為論のアプローチから日本語の心理述語に観察される人称制約、時制制約について論じた研究に着目して、直接目的語型心理動詞は、発話主体が発話時に感じる心的事態を表す表出型と、ある主体が経験する心的事態を知識や情報として聞き手に伝達することをその主たる機能とする演述型の2つに分かれ、この分化が主語の意味的特徴、選択される時制、人称代名詞のタイプをパラメータとする構文論的特徴に支えられるものであることを示す。また、直接目的語に1人称代名詞が置かれるとき、1人称の意味論的特性が表出型と演述型では異なることを認知言語学の考察を踏まえながら示す。

さらに、項の *topicality* に注目することで、演述型は構文論的、機能的特徴から3つの下位タイプに分けられることを明らかにする。具体的には、上記(2)のように、経験者が過去に経験した心的事態を描写するタイプ、以下(3)のように主語に行為者を取り、その行為を描写するタイプ、そして(4)のように、経験者が主語に置かれ、動詞が過去分詞形となり、経験者の心的状態を説明するタイプが区別される。

(3) Paul m'embête.

(4) Je suis énervé.

以上の考察を通して、直接目的語型心理動詞の構文論的、機能的特性の一端を明らかにするとともに、その構文論的、機能的特性が動詞の意味構造の問題とも関わり得ることを最後に示す。